

『子どもの人間観』について

落合 正行

『子どもの人間観』(岩波書店 一九九六)を書くにあたって、私は二つのことを考えました。一つは、人間観を出来るだけ心理学の視点から書こうと考えました。この理由は、これまでの人間観の研究が、哲学、人間学、教育学などの学問で研究され、その結果思想家や哲学者などの人間観が問題にされることが多いからです。私が心理学的

な人間観についての研究をしてきたというわけはないのですが、このテーマは心理学としても大変面白いテーマだと考えていたからです。もちろん、私は学問の枠にこだわるのはあまり好ましいことだとは考えてはいないのですが、人間観に関して心理学的な研究があってもよいと感じていました。

人間観とは何か

もう一つのこととは、「子どもの人間観」ということから、子どもの目を通した人間観を書きたいということでした。例えば、心理学の研究は研究者が子どもの行動を基に子どもの心の特徴を導き出すというものです。大人の枠組で子どもを理解するというのも一つの子どもの理解の在り方であるかもしれませんが、子どもの枠組で子どもを理解するというのもまた重要なことだと考えていました。出来るだけ、子どもの枠組での人の理解について明らかにしたいという考えがありました。それで、本では子どもの詩を用いました。いってみれば、子どもが心理学者として子どもや大人を研究したとしたら、どのようなことが明らかとなるかということも大変重要なことではないかと考えました。しかし、結局これらのことは『子どもの人間観』を書き終えて、これからの課題としてまだ残された問題です。ここでは、以下「子どもの人間観」について再考してみたいと思います。

人間観とは、一般的に人間をどのように見ているか、あるいはとらえているかというような、人間に対する考え方や見方の事です。しかし、心理学的にはこれだけではなく、人間観はある人が人々をどのように理解しているかを示すものであり、また人間観はさまざまな人との付き合いの中から、人について学んだ結果として形成されるものであると考えられます。したがって、人の人間観を知る事はその人を理解するのに重要な情報を提供してくれることとなります。

ところで、私は人間観を人についての信念であるとともに、また人をとらえる枠組として考えました。言い換えると、人間観はよく知らない人を理解する枠組となるということです。もちろん、人を理解する枠組なので、具体的に特定の人についてよく知るようになると一般的な人間観は意味

をなさなくないと考えることが出来ます。したがって、たとえその人について詳しい知識を持たなくても、人間観によって例えばその人には喜びや悲しみがあり、またいろいろな個人の歴史を持って生きていること、さらにその人のことを心配している人がいるであろう事、その人らしい特徴があるであろう事、ある行為にはその人なりの訳があるであろうこと等を背景として眺めることが出来ることだと考えられます。

この様に、どこまで表面には見えないさまざまなる事柄を想定してその人を見ていくことができるかということが、その人を眺めている人の人間観にかかわることだと考えられます。したがって、個人が持つ人間観の豊かさは、人の行為を単一の可能性で推定したり、単一の可能性に決めつけたりするのではなく、どこまで多くの可能性で見ることが出来るかということと言い換えることも出来ず。そして、その人について、またその人の行為

に関するさまざまな情報が得られると、かなり確かにその人のことを判断できるといふことです。

さらに、豊かな人間観を持っているといふことは人を尊重できる見方ができるといふことであり、自分の人間観が人を偏見で見たり、人を尊重できない見方で見ていることがあればそれをモニター出来、そして修正できる様な機能を持つことだと考えました。

人間観の修正

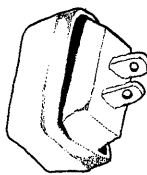
よく知らない人に対しては自分の人間観を適用してその人のことを推定しようとしますが、だんだんとその人を知るようになると初めに持っていた理解の枠組である人間観をその人に合わせて修正していくこととなります。そうすることによって、その人のことをよく知る事が出来るのです。ここで起こっていることは、その人の既存の人間観を越えた人の理解です。そして、同時に特定の

人のことを詳しく知る事で人間についての理解を深めることになりますので、その結果としてこれまでもっていた自分の人間観を変えることにもなるのです。この両方の修正がうまく出来ないときには、いろいろと問題を起こすことになります。

たとえば、お母さんは赤ちゃんとはこの様なものだという赤ちゃん観に基づいて赤ちゃんに働き掛けをすることになりますが、自分の初めに持っていた赤ちゃん観を変えずに自分の赤ちゃんに適用することは、自分の赤ちゃんの特徴を見えなくさせることになります。したがって、この様な場合赤ちゃんとの関係もうまうまいか感じることにもなりかねません。むしろ、一般的な赤ちゃんの特徴を自分の赤ちゃんに合わせて考えていくことが出来ないことに問題があるように思われます。個別の赤ちゃんの理解とともに赤ちゃんをとらえる一般的な枠組をも変えていくことが重要なことだと考えられます。言い換えると、どの程度

具体的な人に自分の人間観を適用できるか、また逆に具体的な人の特徴からどのような点でこれまで持っていた自分の人間観を修正すべきかといったことの判断のバランスが重要なこととなります。

このように、人を見るときには皆にある特定の基準を当てはめて個人を特徴づけるとともに、個人に合わせた多様な基準を持つて眺めることも重要です。そして、この様に人に合わせて多重に基準を変えらるというのは、個人を尊重するという意味でも大変意味のあることです。というのは、同じ基準だけで全ての人を見ることは単純な人間観を持つことにつながり、その結果として適切



に人を理解できないことになってしまふからです。

それでは、人間観はいかに形成されるのでしょうか？

人間観の形成

子どもを取り巻く人には、様々な人がいます。

この様々な人がいるということが、人間観の形成には大切です。様々な人がいるということは、それだけ人の多様性を見ることができなのです。

ところで、人の多様性には二つの種類があります。一つは、人によって異なる多様性です。もう一つは、同一人物の変化性です。子どもは、多くの人の様々な特徴を知ると共に、また同一の人が状況や相手によって多様な側面を見せるという二つの多様性を知り、そのことが人の理解に重要な役割を果たします。というのは、例えば子どもにとってお父さんは偉い面と偉くない面を持っている

るといふように、同一人物のなかに評価の異なる側面を見いだすことができます。このような両面を見ておくことが人を見るときに重要ですし、またそれがあるバランスで把握するということもまた人の理解には重要なことです。言い換えると、例えば人にはよい面と悪い面があるといった把握です。

また、人をどの様に見るかは、その人の他者の知り方を示すものです。従って、人間観をどの様な人の知り方しているかというように言い換えることも出来ます。いずれにせよ、人について知らなければ人間観は持てないのです。私達のまわりには沢山の人がいますが、私達の知っている程度はさまざまです。従って、それによってその人に対する人間性の把握は違うものですし、また他人との評価のズレも生じます。

このように子どもの人間観の形成には、身近な人とのつきあいが必要だと考えられます。

親から学ぶ人間観

子どもは早い時期から親とのかかわりのなかで、親のさまざまな側面を知ることになります。

親は、子どもにとって優しい人であるとともによく怒り恐い人でもあり、自分のことを何でも知っている、自分のことを心配する、自分の事で喜んでくれる、自分のことを気にしてくれている人でもあり、自分の行為が親とつながっている、ということを経験します。このような経験の中から、子どもは人間が単純な存在ではないことを知ることができます。表面に見える部分以外に、多くの側面を持っていることを知ることが、子どもの人間観の基礎を形成していくのです。

人間観は、多様な人との中で形成されるとともに、特定の人との付き合いの中で人の見方も深まるものです。その例として、お母さんが挙げられます。具体的な子どもの詩でこのことを見てみま

しょう。

お母さん

四年 小峯かおり

お母さんは、お父さんが出ちょうで、

いないあいだは、こわい人です。

まるで、ひげがはえたように、いばります。

でも、土曜日にお父さんが、帰る日は、

やさしい女の人にもどります。

お父さんは、そんなことしらないから、

「お母さん二本つけてよ」

といっています。

そしたら、お母さんは小さい声で「ハイ」と、

かわいらしく、いいました。

うえきばち

一年 すぎやまたまみ

おばあちゃんが

おかあさんのだいじにしているうえきばちを
わってしまいました

おばあちゃんは

「ごめんね」ってあやまりました

おかあさんは

「いいよ」ってやさしくいきました

でも、おばあちゃんがかえったら

「また うえきばちかわなあかん」

とぶりぶりとおこっていました

口とところはべつです

このように、子どもはお母さんの多様な側面を
子どもは見えています。同一の人の多様さを認識す
るということは、また自分の多様さを発見するこ
とにもつながります。それだけではなく、お母さ
んの多様性はお母さんのすべての特徴でもあるの
です。そうになると、子どもはそのうちのどれかの
特徴を切り離すことは出来ません。したがって、

お母さんの中には、良い面も悪い面もあること、
矛盾した特徴を同一の人の中に認めるような人の
見方をするのが可能となります。この認識は、
また他者の認識にも通じるものです。ただ、他者
の場合にはかなりその人についての情報が欠落し
ていることがありますので、お母さんの様な認識
にはなかなか至らないのです。

それでは、人間観を持つことがどのような機能
を果しているのでしょうか？

人間観の機能

1 自分の形成

私たちは、人とかかわりの中で自分をつくっ
ていきます。私たちの人とかかわりは、単純では
ありません。親子の関係、兄弟の関係、仲間との
関係、あるいは年齢の上下、地位の上下など様々
な関係の中で私たちは暮らしています。私たちが
このようなさまざまな関係の中で人間について知

るということは、同時にさまざまな自分を知ることでもあります。

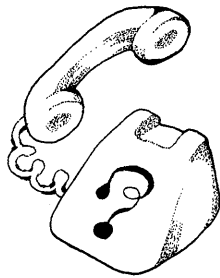
そして、どのような人間観を持つかということとは、自分の知り方、言い換えると自分とはどのような存在かということにかかわります。その中心は、自分の中に重要な他者をどのように取り込むかということだと考えられます。これが、自己の形成に重要なのです。しかし、重要な他者は発達ともに変化していきます。多数になっていきます。そして、人との付き合いの広がりによって、自分を修正することになります。この様な過程で、初めは一人もしくは少数の重要な他者で形成された自己が、仲間などこれまでとは違った重要な他者を自分の中に取り込むときに、これまでの自分を壊して、再形成がなされます。

このように、重要なことは、その人の人間観の背景にその人自身の人間性が深く関係しているということです。人間観がもし多様だとすると、そ

れはその人自身の存在の仕方に深く根差しているからなのです。この様に、人間観の形成は、自分をつくることに置き換えることが出来ると考えられます。

2 他者の受容

人間観は人をどのように見るかということですが、私たちは自分の持つ人間観によって人を理解するとともに、評価していくこととなります。そして、その評価が肯定的な場合には、その人を受容できますが、否定的な評価の場合には、その人



をあまり受け入れることができないのです。このように、人間観は、その人にとってどのような人を受け入れることができるかを決めることにもなるのです。いずれにせよ、人との関係の中で自分が人を受容し、また人からも受容されるという関係は、大変重要だといえます。

3 自分の理解

人間観の形成には、さまざまな人との関係の在り方が問題です。そして、人とのかかわりの中で親しい人の多面性という同一人物の多様性や人はそれぞれ独自の特徴を持っているという人の多様性を知るようになります。たとえば、自分の中に潜む多様性ととも、多様な人の中で自分はそのような位置づけになるのかといったことが認識されます。このことは、また自分を知る枠組にもなるのです。

そして、自分がさまざまな経験の中で役割や状況によって態度が異なったり、相手への認知の在

り方で態度が異なったり、また自分の中に歴史性があることを知るといように自分の変化性に気付くことで、自分を見る枠組がまた人を見る枠組に影響していることも確かです。この様な二つの見方は、相互作用的なのです。いずれにせよ、この様なことから自分の独自性の認識も可能となります。このように、人間観は自分の理解とも密接に関係しているのです。

私たちは自分独自の人間観の良さを認識するとともに、また自分の人間観が人を偏見で見たり、人を尊重できない見方で見ることがあればそれをモニター出来、そして修正できる様な人間観を持つことが意味のある人間観の持ち方だと考えられます。そして、さらに多くの可能性で人を見ること、しかも人を尊重できる様な見方ができるというのが、豊かな人間観だと考えられます。

(追手門学院大学)